

中学生がとる同調行動と対人恐怖心性との関連

本田優子・梶原まどか*・堀川ひかり**・森恵美加***・一期崎直美****

Research on the Relation of Conformity Behavior and Anthropophobia Mentality in a Junior High School Student

Yuuko HONDA, Madoka KAJIWARA*, Hikari HORIKAWA**, Emika MORI***, Naomi ICHIGOZAKI****

(Received by October 1, 2013)

This investigation was conducted in order to clarify relation of the conforming behavior in a junior high school student, and anthropophobia mentality, and it obtained the following conclusions.

The tendency of conforming behavior was high in the woman or the second grader also in the junior high school student. Moreover, the tendency to take the conforming behavior mended externally on the whole was high. In the boy, the second grader, or the student that thinks "it is not good in the atmosphere of a class", the tendency was high. Also in anthropophobia mentality, the tendency for him to be superfluously conscious of especially himself and others was high. The boy's tendency which fears a look was higher than the woman, and the second grader woman was difficult to speak in public. The student who thinks that the atmosphere of its class is good was superfluously conscious of himself or others, and the student who thinks that atmosphere of its class is not good thought that he was weak-willed. Anthropophobia mentality was as high as the student it is easy to take conforming behavior. Especially the student with high anthropophobia mentality was not the student that aligns positively but a student who aligns externally.

Key words : junior high school student, conforming behavior, anthropophobia mentality

はじめに

現代において、青年の人間関係の希薄化は多くの研究者が指摘しており、それに伴い青年は自分の本音を表に出さず、意見を周囲に合わせるような同調的行動をとりやすくなっていることも指摘されている¹⁻³⁾。菊浦・吉岡⁴⁾は、希薄化とは、人との深いつながりを持つことに関して積極的に働きかけない、また深い対人関係を持つとしてもそれらが得られにくい傾向と述べている。また、大学生を対象に友人関係の研究を行った岡田⁵⁾は、先に述べたような現代青年特有の希薄化した人間関係をとっている者も、必ずしも自分の人間関係の在り方に満足していない可能性を示唆している。

さらに、高校生を対象とした葛西・松本⁶⁾・上野ら⁷⁾の研究では、同調行動をとる青年は他者からどう思わ

れているかを気にしていること、同調性が高い者の特徴として他者の視線を強く意識し、友人に同調的な態度をとりながらも、心理的には大きな距離を保ち、自分が傷つかないようにしていると述べられている。また、中村⁸⁾は中学生から大学生を対象にした対人不安に関する研究を行い、人前で行動することに対する緊張と他者からの評価に対する不安が強いことを明らかにしている。

以上のことから、現代の青年は、非常に他者を気にし、対人関係に困難を抱えていることが考えられる。対人関係の困難さを示すものの一つとして、対人恐怖が挙げられる。永井⁹⁾は、対人恐怖は神経症レベルの疾病であるが、健常者における対人恐怖症的な傾向である対人恐怖心性はかなりの割合で見られることが指摘している。また、大学生を対象とした堀井¹⁰⁾の研究において、時代の進行に伴い対人恐怖心性が増大している可能性が示唆されている。さらに岡田¹¹⁾は、友人関係の場において、深刻さを避け表面的に楽しい関わりを求める「群れたがり」指向を持った群において、「他者との関係における自己意識」得点が高かつ

* : 熊本市立力合小学校

*** : 嘉島町立嘉島西小学校

** : 高原町立広原小学校

**** : 西南女学院大学

たことを受け、現代青年の特徴を、表面的に明るく、騒がしく落ち着きがない態度で友人関係を取りながらも、他者からの評価や視線に気を遣う傾向にあると述べている。

さらに、松田¹²⁾は、青年期になると、集団の重要性が増し、集団の規範に従おうとする傾向や、周囲の人々の行動や態度に注意を払い、自分の行動や態度と比較しようとする傾向が顕著になると述べている。

以上のことから、現代の青年は、対人関係に困難さを抱え、過剰な同調行動をとりやすく、対人恐怖性の増大傾向が考えられる。

ここまで青年期における同調や対人恐怖心性について述べてきたが、堀井¹⁰⁾は、対人恐怖心性は中学から高校の時期にかけて増大し始め、大学生の時期には低減することを明らかにしている。このことから、対人恐怖心性は青年期の中でも特に中学時代に高くなり始めると考えられる。

落合・佐藤¹³⁾の中学生、高校生、大学生の友人関係の発達的变化を調査した研究では、特に中学生は、自分の本音を見せず、同調的なつき合い方をしやすいと指摘されている。

これらのことから、同調行動と対人恐怖心性の関連において、対人恐怖心性、同調性の両方に高まりが見られる中学生に焦点を当て研究を行うことは意義があると考えられる。よって、現代の中学生の友人関係における心理理解や、対人恐怖心性が高い生徒、友人関係についての悩みを抱える生徒などに対する、健康相談活動、個別指導の一資料とするために、中学生のとの同調行動と対人恐怖心性の関連を明らかにしたい。

研究方法

1. 調査方法

1) 調査期間

平成24年10月下旬～11月上旬

2) 調査対象

質問紙調査は、調査について協力が得られたK市内の中学校1校の1年生～3年生、計415名、男子201名、女子214名を対象とした。対象校は、K市内の東部に位置する中学校で、全校生徒数約870名である。

3) 調査方法

調査対象校の校長に対し、調査内容の説明を行い本研究への協力を求め同意を得た。後日、協力が得られた学級担任のクラスで、生徒に対して学級担任が調査内容の説明を行い、集団一斉調査を行った。

2. 調査内容

1) 調査対象者のプロフィール

学年、性別、部活動加入の有無について選択を求めた。

2) 得意なこと・頑張っていることについて

勉強、運動、部活動、習い事、趣味、人との関わり、その他から複数選択を求めた。

3) クラスの雰囲気について

クラスの雰囲気について、良い、やや良い、あまり良くない、良くないの4つから1つ選択を求めた。

4) 同調行動について

同調行動についての質問項目は、葛西、松本⁵⁾が作成した同調行動尺度を使用した。構成因子は、「仲間への同調因子(12項目)」「自己犠牲追従因子(11項目)」の計2因子23項目から成り立っている。選択肢は、4「あてはまる」、3「ややあてはまる」、2「どちらともいえない」、1「あまりあてはまらない」、0「あてはまらない」の5件法にて回答を求めた。平均点は0～4点で、点数が上がるにつれて同調行動をとりやすいことを示している。

5) 対人恐怖心性について

対人恐怖心性についての質問項目は、佐藤、田代¹⁴⁾が作成した対人恐怖心性尺度のうち、「大勢の人の中向かい合って話すのが苦手だ。」を「大勢の前で話すのが苦手だ。」に変更し、「いつも頭が重い。」を「いつも頭が重い感じがする。」に変更して用いた。対人恐怖心性尺度の構成因子は、「自我過剰意識因子(5項目)」「集団不適応因子(5項目)」「人前での発言困難因子(5項目)」「視線恐怖因子(5項目)」「意志薄弱因子(5項目)」「無気力因子(5項目)」の計6因子30項目から成っている。選択肢は、3「あてはまる」、2「ややあてはまる」、1「あまりあてはまらない」、0「あてはまらない」の4件法にて回答を求めた。合計得点は0～90点で、点数が上がるにつれて対人恐怖心性が高くなることを示している。

6) 自由記述

自由記述欄を設け、感想や質問等の記入を求めた。

3. 倫理的配慮

今回の調査では、調査目的および協力依頼を質問紙調査票の冒頭に記述し、また調査実施前に学級担任から口頭で説明を行い、調査対象者に同意を求めた。そして回答は無記名とし、質問紙への回答をもって、調査協力への同意とみなした。

4. 分析方法

分析は、各個人について同調行動は平均点、対人恐怖は合計点を求めた。回答割合の比較は χ^2 検定、平均値の差の比較は、マン・ホイットニーのU検定、クラスカルウォリス検定を用い、得点間の関連は、スピアマンの順位相関係数を用いた。また、各得点の平均値±標準偏差(以下SDとする)により、得点高群

と得点低群に分けた。なお、統計処理には Excel 統計 2008 を用い、1%及び5%の危険率で有意差の判定を行った。

5. 用語の操作的定義

1) 同調行動

同調行動とは、藤原¹⁵⁾を参考にし、今回は「自分とは異なる意見、態度、行動を周囲から求められたとき、迷いながらも周りの意見、態度、行動に合わせてしまう傾向」と定義した。

同調行動は2因子から成っており、本研究で使用した同調行動尺度を作成した葛西・松本⁶⁾はこの2因子を以下のように説明している。仲間への同調因子は、友人や仲間と同じことをしたい、積極的に友人と同じ行動をとりたいという意識を表しており、内心から他者の意見や行動を受け入れる「内面的同調」との関連が強い。一方、自己犠牲追従因子は、自分を抑えて相手と同じことをしたいという意識を表しており、自分を犠牲にしても友人に合わせようとするものであり、自分は心から納得していないにもかかわらず、友人と同じ行動をしているため、「表面的同調」と関連が深い。

2) 対人恐怖心性

対人恐怖心性とは、堀井・小川¹⁶⁾を参考にし、今回は「一般の健常者にも見られる、対人恐怖の傾向である人見知りや過度の気遣い、対人緊張などの心理的な傾向」と定義した。堀井・小川¹⁶⁾は、対人恐怖心性を以下の6因子に分けている。

自他過剰因子は、対人関係において、他者の評価に対する過剰な意識や、同時に他者に評価される自己に対する過剰な意識、すなわち、自他へのとらわれを表す。集団不適応因子は、集団という対人場面に溶け込んで自由にふるまえないという非社会的側面に関する悩みを表す。人前での発言困難因子は、シャイで引っ込み思案ゆえに生じやすい臨場的な社会的不安意識を表す。視線恐怖因子は、対人接触場面において、他者とまなざしが合うことや他者から見られることに対する恐れを表す。意志薄弱因子は、自らの意志や感情を統制できないことに対する不安や不満感を表す。この悩みは対人意識へのとらわれの中で生じる自己に対する否定的な問題意識の側面を表す。無気力因子は、生への充実感が持てず、抑うつ的になり、心身の不調を訴えるというような悩みを表す。このような悩みは、過剰な対人意識や症状へのとらわれによって二次的に誘発されやすい悩みである。

結果および考察

1. 質問紙調査票の回収結果

表1, 2に示すとおり、分析対象者は、全体で367名であり、男性168名、女性199名、1年117名、2年122名、3年128名であった。対象者の男女割合は、男子が45.7%、女子が54.3%と女子がやや多かった。学年で見ると、1年(31.9%)、2年(33.2%)、3年(34.9%)で3年生、2年生、1年生の順に多かった。

性別	人数	割合
男子	168	45.7%
女子	199	54.3%
全体	367	100%

学年	人数	割合
1年	117	31.9%
2年	122	33.2%
3年	128	34.9%
全体	367	100%

2. 対象集団の特性について

部活加入割合は、部活をしている生徒が63.2%、部活をしていない生徒が36.8%で部活をしている生徒の方が多かった。部活をしている生徒の男女割合は、男子58.9%、女子66.8%であり、女子の方が部活をしている生徒が多かった。これに対して、文部科学省の調査¹⁷⁾では、中学生の男女別の部活加入割合は、運動部では男子83.0%、女子64.1%であり、男子の方が部活をしている生徒が多いが、運動部以外では男子7.9%、女子27.1%であり、合計すると男女ともほぼ同様の部活動加入割合であった。よって全国と比較すると今回の対象者は部活動加入割合は低いと考えられる。次に、部活をしている生徒の学年別の割合は、1年84.6%、2年73.8%、3年33.6%であり、2年生が最も部活をしている生徒が多かった。

頑張っていること・得意なことについて、全体では「勉強」が55.1%と最も多く、次いで「部活動」52.1%であった。男女間では、「運動」(P<0.01)と「趣味」(P<0.05)は男子が有意に多く、「習い事」は女子が有意(P<0.01)に多かった。上妻・福留¹⁸⁾の中学1年生と3年生、高校1年生を対象とした研究では、中学1年生と中学3年生において、男子は「運動」、女子は「習い事」を頑張っている者が多いという結果が出ており、本研究の結果とほぼ同様であった。次に、学年間で見ると、他学年に比べて「勉強」は3年生に有意(P<0.01)に多く、「部活動」は1, 2年生に有意(P<0.01)に多かった。

クラスの雰囲気の感じ方については、全体では「良い」が46.9%と最も多く、次いで「やや良い」が

45.2%で、クラスの雰囲気肯定的にとらえている生徒が大多数であることが分かる。深谷¹⁹⁾の東京・神奈川の中学1～3年生を対象にした調査で、学級の雰囲気について楽しいクラスかを4択で尋ねている質問での回答割合は「とてもそう思う」31.1%、「わりとそう思う」49.6%、「あまりそうでない」13.2%、「ぜんぜんそうでない」6.1%と、全体においては今回とほぼ同様の結果であった。この深谷の研究¹⁹⁾では学年による違いが見られたが、本研究では、クラスの雰囲気を感じる方に学年差が見られなかった。これは本研究の対象集団の、学業面、進路面についての悩みの学年差が少なかったのではないかと考えられる。しかしながら、深谷²⁰⁾が明らかにしているように、クラスをどう感じるか、楽しいと感じるかは、生徒の体調面や友人関係の良否、担任教師なども影響するため、クラスの雰囲気を感じる方が学年変化するかどうかについては、さらなる研究が期待される。

3. 同調行動について

表3 全体・男女における同調行動各因子の平均得点

同調行動各因子	全体 n=367		男子 n=168		女子 n=199		有意差
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	
仲間への同調因子	2.0	0.69	1.9	0.64	2.1	0.72	**
自己犠牲追従因子	2.1	0.71	2.0	0.67	2.2	0.73	**
有意差	*		*		n.s.		

マン・ホイットニーのU検定 **: $P<0.01$ *: $P<0.05$ n.s.; 有意差なし

全体の同調行動得点は 2.0 ± 0.61 点であった。また表3に示すとおり、同調行動得点を因子ごとに見ると、仲間への同調因子(2.0 ± 0.69 点)よりも自己犠牲追従因子(2.1 ± 0.71 点)の方が有意($P<0.05$)に得点が高かった。因子の特徴から考えると、本研究の対象集団は、自分を犠牲にして友人に合わせる傾向が高いことが考えられる。深谷¹⁹⁾の研究に見られるように、現代の中学生は人間関係のあり方が自分の利益に直接影響することが多いので、人間関係を円滑にするため自分を偽ったり、人に嫌われないように無理をしたりするような自己犠牲的な人付き合いしていると考えられる。

さらに、同調行動各質問項目の得点を見ると、全体においては「12. 何かをするときみんなと一緒にだと安心する」(3.0 ± 1.03 点)、「21. 友達に嫌な思いをさせてまで、自分の意見を通したくない」(3.0 ± 1.16 点)が最も得点が高かった。つまり、周囲に敏感で、

自分を抑えるといった特徴が見られる。

次に、性別で見ると、男子(1.9 ± 0.57 点)に比べて女子(2.1 ± 0.63 点)の方が同調行動得点は高く、有意差($P<0.01$)が見られた。

さらに因子別で見ても、表3に示すとおり、男子に比べて女子の方が仲間への同調も自己犠牲追従も高い得点を示しており、有意差($P<0.01$)が見られた。塚本・濱口²¹⁾は、中学生女子の友人関係は、親密性の相互確認や排他的、閉鎖的な特徴を持つため、1度でも仲間のグループから外れた場合に、そのグループに戻ることに難しくなると述べている。また、石田・丹村²²⁾の研究では、集団の閉鎖性が高いほど、生徒の同調志向が高いことを示している。このことから、中学生女子は、同調行動を取ることにより、親密性を確認しつつ、閉鎖的なグループの中で、そこから疎外されないように他者に同調する傾向があると考えられる。よって今回、男子よりも女子の方が同調行動をとりやすいという結果が得られたと考えられる。

性別における因子間の差を見ると、表3に示すとおり、男子は仲間への同調よりも自己犠牲追従が有意($P<0.05$)に高かった。石田・丹村²²⁾によると、男子は女子に比べて、階層性が高く、自分の意志とは関係なく自分より階層が高い者に同調する傾向があることを指摘している。これはつまり、男子はグループ内に上下関係があり、自分の意見を抑え、リーダーなど自分よりもグループ内で上の立場にいる人の意見に従う傾向にあるということである。また、崔²³⁾の研究において、男子は同調のために、何かについて自分だけが感じている感情は表さないようにする自己抑制的傾向があると述べられているが、これは今回の自己犠牲追従傾向の強さと関連していると考えられる。

表4 学年における同調行動得点

	1年 (A)	2年 (B)	3年 (C)	有意差 (0.01)
n	117	122	128	
平均	2.0	2.2	1.9	B>C
標準偏差	0.64	0.56	0.60	

クラスカル・ウォリス検定 $P<0.01$

次に、学年で見ると、2年生が最も同調行動得点が高く、2年生(2.2 ± 0.56 点)と3年生(1.9 ± 0.60 点)の間に有意差($P<0.01$)が見られた。

表5 学年における同調行動各因子の平均得点

同調行動各因子	1年(A)		2年(B)		3年(C)		有意差(0.01)	有意差(0.05)
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差		
仲間への同調因子	20	0.73	21	0.61	19	0.72	ns.	B>C
自己犠牲追従因子	20	0.75	23	0.68	20	0.67	B>C	B>A
有意差	ns.		*		ns.			

マン・ホイットニーのU検定 *P<0.05 ns.;有意差なし
クラスカル・ウォリス検定 P<0.01 P<0.05

因子ごとに見ると、仲間への同調因子、自己犠牲追従因子どちらにおいても他の学年に比べて2年生の両因子得点が有意 (P<0.01, 0.05) に高かった。また、2年生は、仲間への同調因子得点よりも自己犠牲追従因子得点が有意 (P<0.05) に高かった。崔²³⁾の研究では、中学2年生は他学年に比べて、感情表出の制御を多く行うという結果から、友人の中に生じた感情に対し抑制したり、強調したりすることによる同調を行い、友人と同じ感情を共有しようとする傾向が強いることが指摘されている。このことから2年生が他学年に比べて自分を犠牲にして同調する傾向にあると考えられる。

各学年の性別ごとに同調行動得点を見てみると、1年男子・3年女子 (P<0.05)、3年男子 (P<0.01) よりも、2年女子の同調行動得点が有意に高かった。

表6 学年性別における同調行動各因子の平均得点

学年性別	n	仲間への同調因子		自己犠牲追従因子	有意差	
		平均	標準偏差			
1年男子(A)	n=56	1.8	0.66	1.9	0.77	ns.
1年女子(B)	n=61	2.1	0.78	2.1	0.72	ns.
2年男子(C)	n=50	1.9	0.61	2.2	0.63	ns.
2年女子(D)	n=72	2.2	0.57	2.4	0.70	ns.
3年男子(E)	n=62	1.8	0.65	2.0	0.59	ns.
3年女子(F)	n=66	1.9	0.78	2.0	0.73	ns.
有意差 (0.05)		D > E		D > A, D > E		

マン・ホイットニーのU検定 ns.;有意差なし
クラスカル・ウォリス検定 P<0.05

さらに、表6に示すとおり、同調行動各因子得点を各学年の性別ごとに見ると、仲間への同調因子では、3年男子より2年女子の方が有意 (P<0.05) に得点が高く、自己犠牲追従因子でも3年男子より2年女子の方が、1年男子より2年女子の方が有意 (P<0.05) に得点が高かった。

崔²³⁾が中学2年生は、部活動などの社会的場面での人間関係を重要視しているため、人間関係に気を使い、相手に合わせて感情を抑制したり強めたりして同調をたくさん行っていると指摘していることや、上記の中学2年生、中学生女子の特徴が反映されて、今回2年女子の同調傾向が強いという結果に至ったと考えられる。

部活動加入の有無では、同調行動得点には有意差がみられなかった。しかし、更に詳しく見ると、同調行動の仲間への同調因子得点において、部活をしていない生徒 (1.8 ± 0.76 点) より、部活をしている生徒 (2.1 ± 0.63 点) の方が有意 (P<0.01) に得点が高かった。つまり部活をしていない生徒は、積極的に友人と同じ行動をとりたいという意識がかなり低いことが考えられる。

得意なこと・頑張っていることの項目別で見ると、同調行動得点において有意差は見られなかったが、因子に分けると「勉強」を選んだ生徒では、仲間への同調因子得点 (2.0 ± 0.70 点) より、自己犠牲追従因子得点 (2.1 ± 0.72 点) が有意 (P<0.05) に高かった。

表7 クラスの雰囲気を感じ方別における同調行動各因子の平均得点

同調行動各因子	良い (A)		やや良い (B)		あまり良くない (C)		良くない (D)		有意差
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	
仲間への同調因子	2.0	0.68	2.0	0.72	1.9	0.56	1.3	0.44	ns.
自己犠牲追従因子	2.1	0.70	2.1	0.71	2.0	0.79	2.1	0.27	ns.
有意差	ns.		ns.		ns.		*		

マン・ホイットニーのU検定 *P<0.05 ns.;有意差なし
クラスカル・ウォリス検定 ns.;有意差なし

表7に示すとおり、クラスの雰囲気を感じ方別においては、クラスの感じ方の違いによって同調行動得点や各因子得点に有意差は見られなかった。しかし、クラスの雰囲気を「良くない」と感じている生徒は、仲間への同調因子得点がかなり低く、自己犠牲追従因子得点と有意差 (P<0.05) が見られた。つまり、クラスの雰囲気を「良くない」と感じている生徒は、積極的

な同調よりも表面的な同調を多くとっていることが考えられる。

4. 対人恐怖心性について

全体の対人恐怖心性得点は 32.6 ± 17.59 点であった。表 8 に示すとおり、対人恐怖心性各因子得点で見ると、自他過剰因子得点 (6.4 ± 3.58 点) が他因子得点よりも高かった。自他過剰因子は、対人関係において、他者の評価に対する過剰な意識や、同時に他者に評価される自己に対する過剰な意識、すなわち、自他へのとらわれを表している。対人恐怖心性各質問項目の得点を見ても、全体においては「1. 他の人が自分をどのように思っているのかとても不安になる」(1.9 ± 0.91 点) の得点が最も高かった。

表 8 全体・男女における対人恐怖心性各因子の平均得点

	全体 n=367		男子 n=168		女子 n=199		有意差
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	
自他過剰因子(A)	6.4	3.58	6.1	3.41	6.6	3.72	n.s.
集団不適応因子(B)	4.6	3.71	4.7	3.63	4.5	3.79	n.s.
人前での発言困難因子(C)	6.2	3.93	6.1	3.90	6.3	3.95	n.s.
視線恐怖因子(D)	4.4	3.64	4.9	3.71	4.0	3.54	*
意志薄弱因子(E)	6.2	3.47	6.3	3.57	6.1	3.38	n.s.
無気力因子(F)	4.9	3.51	5.1	3.50	4.8	3.52	n.s.
有意差(0.01)	A>B,A>D, A>F,C>B E>B,C>D, C>F,E>D,E>F		E>B		A>B,A>D, C>D,E>D		
有意差(0.05)	n.s.		A>B,E>D,C>B		A>F,C>B		

クラスカル・ウォリス検定 $P<0.01$ $P<0.05$ マン・ホイットニーのU検定 * $P<0.05$ n.s.; 有意差なし

学年別に対人恐怖心性得点を見ると、1年 32.1 ± 18.83 点、2年 34.1 ± 18.21 点、3年 31.7 ± 15.77 点であり、有意差は見られなかった。

表 9 に示すとおり、対人恐怖心性各因子の得点を見ると、1年生や3年生においては、自他過剰因子得点が他因子得点に比べて有意 ($P<0.01$, 0.05) に高く、2年生では人前での発言困難因子得点が他因子に比べて有意 ($P<0.01$, 0.05) に高かった。人前での発言困難因子は、シャイで引っ込み思案ゆえに生じやすい臨場的な社会的不安意識を表している。

中学生は思春期に突入し、それまで依存していた親から離脱し、他者との新たな関係を築き始める時期を

表 9 学年における対人恐怖心性各因子の平均得点

	1年 n=117		2年 n=122		3年 n=128		有意差
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	
自他過剰因子(A)	6.4	3.88	6.4	3.56	6.3	3.35	n.s.
集団不適応因子(B)	4.5	3.86	4.9	3.86	4.4	3.42	n.s.
人前での発言困難因子(C)	6.0	3.92	6.7	4.15	5.9	3.69	n.s.
視線恐怖因子(D)	4.4	3.91	4.7	3.80	4.2	3.23	n.s.
意志薄弱因子(E)	6.1	3.75	6.4	3.49	5.9	3.17	n.s.
無気力因子(F)	4.7	3.57	5.0	3.66	5.0	3.33	n.s.
有意差(0.01)	A>B,A>D		C>D,E>D		A>B,A>D, C>D,E>D		
有意差(0.05)	A>F,C>B, E>B,E>D		A>D,C>B, F>B,C>F		C>B,E>B		

クラスカル・ウォリス検定 $P<0.01$ $P<0.05$ n.s.; 有意差なし

迎える。その中で、どのような自分であれば他者に受け入れられるのか、社会に受け入れられるような態度や姿とはいかなるものなのかと自らの振る舞いに敏感にならざるをえなくなり、それが社会的場面における緊張や困惑につながると堀井¹⁰⁾は指摘している。よって、対人関係における自他への過剰な意識や社会的不安意識は、一般中学生の特徴であると考えられる。

次に、対人恐怖心性得点を性別で見ると、男子 33.1 ± 17.69 点、女子 32.3 ± 17.54 点で、有意差はなかった。

また、対人恐怖心性各因子得点を見ると、男子では意志薄弱因子得点 (6.3 ± 3.57 点)、女子では自他過剰因子得点 (6.6 ± 3.72 点) が最も高かった。

男女間に有意差が見られたものは、視線恐怖因子のみであり、女子 (4.0 ± 3.54 点) よりも男子 (4.9 ± 3.71 点) の方が有意 ($P<0.05$) に得点が高かった。さらに、対人恐怖心性質問項目別の得点を見ても、「4. 人と目を合わせていられない」、「10. 人の目を見るのがとてもつらい」、「16. 人と話をするとき、目をどこに持って行っていいかわからない」の3項目で、女子よりも男子のほうが有意 ($P<0.01$) に高かった。今回の結果は、堀井¹⁰⁾の研究の女子より男子の方が人の目が気になる悩み(視線恐怖)得点が高いという結果と一致している。堀井¹⁰⁾は、男子は生物学的にも心理社会的にも攻撃性が強く、その特性が攻撃性を内包する視線恐怖心性の強さと密接な関連にあると指摘している。つまり、男子が対人場面において視

線恐怖傾向が強いのは、対人恐怖心性の根底に、男子がもともと持つ他者との競争意識があるためであると考えられる。

対人恐怖心性得点を各学年の性別ごとに見てみると、有意差は見られなかったが、対人恐怖心性得点が最も高いのは2年女子（34.7 ± 19.53点）であった。

表 10 学年性別における対人恐怖心性の各因子の平均得点

対人恐怖心性各因子	1年男子		1年女子		2年男子		2年女子		3年男子		3年女子		有意差
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	
自他過剰因子(A)	6.0	3.64	6.8	4.09	6.0	3.41	6.6	3.66	6.2	3.25	6.5	3.46	n.s.
集団不適応因子(B)	4.7	4.13	4.2	3.62	4.6	3.54	5.1	4.09	4.8	3.26	4.0	3.56	n.s.
人前での発言困難因子(C)	5.9	4.05	6.1	3.83	6.1	4.10	7.2	4.16	6.1	3.67	5.6	3.73	n.s.
視線恐怖因子(D)	5.1	4.11	3.8	3.63	5.0	3.53	4.4	3.97	4.6	3.51	3.8	2.90	n.s.
意志薄弱因子(E)	5.9	3.82	6.3	3.70	6.4	3.56	6.4	3.47	6.4	3.38	5.4	2.91	n.s.
無気力因子(F)	4.9	3.65	4.5	3.52	5.0	3.54	5.0	3.77	5.4	3.39	4.7	3.27	n.s.
有意差(0.01)	n.s.	A>D, E>D		n.s.	C>D		n.s.	A>B, A>D					
有意差(0.05)	n.s.	A>B, C>D		n.s.	A>D, E>D		n.s.	n.s.					

クラスカル・ウォリス検定 P<0.01 P<0.05 n.s.:有意差なし

表 10 に示すとおり、対人恐怖心性各因子の得点を見ると、1年女子と3年女子は自他過剰因子得点が高くなり、2年女子は人前での発言困難因子得点が高くなり、2年女子は人前での発言困難傾向が高かったと考えられる。

2年女子は他学年に比べて、感情の抑制を行う傾向が高いこと⁹⁾に加え、藤岡・稲岡²⁴⁾が、2年女子は、他人との付合に対する失敗への不安を示す対人不安傾向が高いということから、今回2年女子は、人前での発言困難傾向が高かったと考えられる。

部活加入の有無で対人恐怖心性得点を比較すると、部活をしている生徒が 32.2 ± 17.98 点であるのに対し、部活をしていない生徒は 33.5 ± 16.93 点で、有意差はなかった。また、対人恐怖心性各因子得点を見ると、部活加入の有無に関らず、自他過剰因子得点、人前での発言困難因子得点が有意 (P<0.01, 0.05) に高かった。これは、中学生全体における対人恐怖心性の各因子得点を見たときの結果と同様であった。これらのことから、部活加入の有無による対人恐怖心性に差はないと考えられる。

得意なこと・頑張っていることの項目別において対人恐怖心性得点を見ると、有意差はなく、「その他」(35.8 ± 18.47 点)、「趣味」(32.3 ± 18.29 点)を選択した人の対人恐怖心性得点が高かった。

また、対人恐怖心性各因子得点を見ると、「勉強」、「運動」、「部活動」、「趣味」、「人との関わり」、「その他」を選んだ生徒は自他過剰因子得点が高く、「趣味」、「その他」の生徒はこれに加えて意志薄弱因子得点も高かった。「習い事」を選んだ生徒のみ人前での発言困難因子得点が高かった。

表 11 クラスの雰囲気を感じ方別における対人恐怖心性得点

	良い (A)	やや良い (B)	あまり良くない (C)	良くない (D)	有意差 (0.01)
n	172	166	23	5	
平均	27.6	36.1	44.3	36.6	C > A B > A
標準偏差	16.04	17.37	20.41	14.10	

クラスカル・ウォリス検定 P < 0.01

表 11 に示すとおり、クラス雰囲気において対人恐怖心性得点を見ると、「良い」と感じている生徒 (27.6 ± 16.04 点) より、クラスの雰囲気を「あまり良くない」と感じている生徒 (44.3 ± 20.41 点)の方が対人恐怖心性得点が高く、また、「良い」と感じる生徒 (27.8 ± 16.04 点) より、「やや良い」と感じている生徒 (36.1 ± 17.37 点)の方が有意 (P<0.01) に対人恐怖心性得点が高かった。これはつまり、クラスの雰囲気を肯定的に捉えている生徒の方が対人恐怖心性は低いということが考えられる。

対人恐怖心性各因子得点を見ると、クラスの雰囲気を「良い」、「やや良い」と感じている生徒は自他過剰因子得点が高く、「良い」と感じている生徒はこれに加えて人前での発言困難因子得点も高かった。また、意志薄弱因子において、クラスの雰囲気を「良くない」(8.4 ± 4.04 点)、「あまり良くない」(8.0 ± 3.91 点)と感じている生徒は、「良い」(5.5 ± 3.51 点)、「やや良い」(6.5 ± 3.21 点)と感じている生徒と比べて、意志薄弱因子得点が高かった。田所²⁵⁾の研究において、学級の雰囲気を悪いと感じている生徒が多いクラスには、自己肯定感が低い生徒が多い傾向が見られている。ここで、意志薄弱因子は、低い自己肯定感とつながると考えられる「自分の意志や感情を統制できない不安感や不満感」を表しているため、学級の雰囲気を否定的にとらえる生徒は意志薄弱因子得点が高いという結果につながったのではないかと考えられる。

5. 同調行動と対人恐怖心性の関連について

1) 全体、性別における同調行動得点と対人恐怖心性得点の関連

まず、表 12 に示すとおり、全体における同調行動

得点と対人恐怖心性得点の関連を見ると、 $r_s = 0.39$ とやや正の相関が見られた。また、全体における同調行動得点を高群、低群に分けて見ると、同調行動得点高群 (43.8 ± 20.20 点) は同調行動得点低群 (22.8 ± 15.71 点) より対人恐怖心性得点が有意 ($P < 0.01$) に高かった。これはつまり、同調行動をとりやすい生徒ほど対人恐怖心性傾向が高いことを示唆していると考えられる。これに関連して葛西・松本⁶⁾は、日常生活において不安が高い場合、他者に同調する傾向があると述べている。このことから、対人恐怖心性が高い人は、対人場面における不安を軽減するために同調行動をとっているのではないかと考えられる。

表 12 全体・男女における同調行動得点と対人恐怖心性得点の関連 (r_s)

	対人恐怖心性得点		
	全体	男子	女子
	n=367	n=168	n=199
同調行動得点	0.39**	0.38**	0.42**

スピアマンの順位相関係数 **: $P < 0.01$

また、表 12 に示すとおり、男女別における同調行動得点と対人恐怖心性得点の関連を見ると、男子 $r_s = 0.38$ でやや正の相関があり、女子 $r_s = 0.42$ とかなりの正の相関が見られた。さらに男女別の同調行動得点を高群、低群に分けて見ると、男子で同調行動得点高群 (44.2 ± 17.27 点) は低群 (24.4 ± 17.67 点) よりも対人恐怖心性得点が有意 ($P < 0.01$) に高く、女子でも、同調行動得点高群 (46.7 ± 19.79 点) は低群 (19.2 ± 12.57 点) よりも対人恐怖心性得点が有意 ($P < 0.01$) に高かった。つまり、男女に関わらず同調行動が高い人は対人恐怖心性も高いという結果となった。今回の男女別に見た同調行動と対人恐怖心性の関連で、特に女子に正の相関が強く見られたのは、葛西・松本の調査⁶⁾の、女子は男子に比べて円滑な友人関係を維持することへの関心が高いという指摘から、中学女子は友人関係の不安を低減しようとして同調行動という手段をとりやすいためではないかと考えられる。

表 13 全体・男女における同調行動得点と対人恐怖心性各因子得点の関連 (r_s)

対人恐怖心性各因子	同調行動得点		
	全体	男子	女子
	n=367	n=168	n=199
自他過剰因子	0.45**	0.42**	0.47**
集団不適応因子	0.22**	0.26**	0.21**
人前での発言困難因子	0.46**	0.40**	0.50**
視線恐怖因子	0.27**	0.29**	0.30**
意志薄弱因子	0.32**	0.31**	0.35**
無気力因子	0.21**	0.25**	0.21**

スピアマンの順位相関係数 **: $P < 0.01$

表 13 に示すとおり、全体における同調行動得点と対人恐怖心性各因子得点の関連を見ると、同調行動得点と特に関連の強かった対人恐怖心性各因子得点は、人前での発言困難因子 ($r_s = 0.46$)、自他過剰因子 ($r_s = 0.45$) であり、同調行動得点とかなりな正の相関が見られた。これはつまり、同調行動傾向と関連が深い対人恐怖心性は、特に人前での発言困難、自他過剰であると考えられる。玉上²⁶⁾は、集団から孤立することに対して強い恐怖を抱く人ほど、主張の場面において同調行動をとりやすいと述べており、これは人前での発言困難傾向にあると考えられる。さらに、良好な友人関係を重要視するような自他過剰的傾向の強い人は、同調行動をとりやすいと述べている²⁶⁾ことから、今回の結果につながったのではないかと考えられる。

さらに表 13 に示すとおり、男女別の同調行動得点と対人恐怖心性各因子得点の関連を見ると、特に男子では自他過剰因子 ($r_s = 0.42$) が強く同調行動と関連し、女子では人前での発言困難因子 ($r_s = 0.50$) が強く同調行動と関連していることが分かった。堀井・小川¹⁶⁾は、劣等意識が強いほど意志薄弱傾向が強いことを指摘している。さらに男子は女子より階層性が強い²²⁾ということを見ると、男子は自分より上位の人間に対して過敏になりやすく、自他過剰と同調行動の関連が顕著にあらわれやすいと考えられる。また、塚本・濱口²¹⁾は、中学生女子は、親密性の相互確認や排他的、閉鎖的な特徴を持つため、1度でも仲間のグループから外れた場合に、そのグループに戻ることに難しくなると述べている。このことから、中学生女子は、閉鎖的なグループの中におり、そのグループから疎外されたくないという不安を抱え、発言困難傾向にあると考えられる。以上の男女の特徴より、同調行動と関連する対人恐怖心性の因子においては、男女で異なる傾向が考えられる。

表 14 全体・男女における同調行動各因子得点と対人恐怖心性得点の関連 (r_s)

同調行動各因子	対人恐怖心性得点		
	全体 n=367	男子 n=168	女子 n=199
仲間への同調因子	0.25**	0.24**	0.28**
自己犠牲追従因子	0.45**	0.44**	0.48**

スピアマンの順位相関係数 **:P<0.01

表 14 に示すとおり、同調行動の各因子得点と対人恐怖心性得点の関連を見ると、仲間への同調因子と、対人恐怖心性得点の関連は、 $r_s = 0.25$ とやや正の相関が見られた。自己犠牲追従因子と対人恐怖心性得点の関連は、 $r_s = 0.45$ とかなりな正の相関が見られた。これはつまり、対人恐怖心性傾向と関連が深い同調行動は、特に自己犠牲追従であると考えられる。

同調行動各因子の得点を高群、低群に分けて見ると、仲間への同調因子得点高群 (38.9 ± 20.33 点) は仲間への同調因子得点低群 (27.5 ± 19.73 点) より対人恐怖心性得点が高い ($P<0.01$) に高かった。また、自己犠牲追従因子得点高群 (48.5 ± 17.72 点) は自己犠牲追従因子得点低群 (21.2 ± 15.20 点) より対人恐怖心性得点が高い ($P<0.01$) に高かった。つまり、仲間への同調因子得点も自己犠牲追従因子得点も得点が高いほど対人恐怖心性得点が高いということであり、積極的にも表面的にも同調しやすい生徒は対人恐怖心性傾向が高いと考えられる。

上記で述べたように、同調行動各因子の得点と対人恐怖心性の関連を見ていくと仲間への同調因子よりも、自己犠牲追従因子が対人恐怖心性と関連が特に強いことが分かった。さらに、自己犠牲追従因子と対人恐怖心性各因子との関連を詳しく見ると、人前での発言困難因子が自己犠牲追従因子と強く関わっていることが分かった。これに関連して、栗林²⁷⁾ はシャイな人ほど自分の本心を隠し、自己防衛的な意味で作り笑いやごまかしといった周囲の雰囲気と同調すると指摘している。つまり、人前での発言困難因子はシャイで人見知りが生じる社会的不安意識であり、自己犠牲追従因子は表面的な同調傾向を表しているため、今回、自己犠牲追従因子と人前での発言困難因子に関連が見られたと考えられる。

男女別に同調行動各因子の得点と対人恐怖心性の関連を見ていくと、男子 ($r_s = 0.44$)、女子 ($r_s = 0.48$) どちらも、自己犠牲追従因子が対人恐怖心性と強く関わっていることが分かった。これは全体と同様の結果であり、男女に関わらず、全体として表面的な同調を

とりやすい人は、対人恐怖心性が高いと考えられる。

2) 学年別にみた同調行動得点と対人恐怖心性得点の関連

表 15 に示すとおり、学年別における同調行動得点と対人恐怖心性得点の関連を見ると、1 年 $r_s = 0.47$ 、2 年 $r_s = 0.42$ とかなりな正の相関があり、3 年は $r_s = 0.28$ とやや正の相関が見られた。さらに同調行動得点を高群、低群に分けて対人恐怖心性得点を比較すると、1 年生の高群 (41.3 ± 21.49 点) は、低群 (17.6 ± 13.81 点) より有意 ($P<0.01$) に高く、2 年生と 3 年生でも同様の結果であった。今回の研究で同調行動と対人恐怖心性の関連に大きな学年差が見られなかったのは、先にも述べたような対人関係における自他への過剰な意識や社会的不安意識という一般中学生の特徴が、学年に関係なく、同調行動に影響していると考えられる。

表 15 学年別における同調行動得点と対人恐怖心性得点の関連 (r_s)

	対人恐怖心性得点		
	1 年 n=117	2 年 n=122	3 年 n=128
同調行動得点	0.47**	0.42**	0.28**

スピアマンの順位相関係数 **:P<0.01

表 16 学年別における同調行動得点と対人恐怖心性各因子得点の関連 (r_s)

対人恐怖心性各因子	同調行動得点		
	1 年 n=117	2 年 n=122	3 年 n=128
自他過剰因子	0.53**	0.46**	0.37**
集団不適応因子	0.31**	0.25**	0.09
人前での発言困難因子	0.51**	0.50**	0.36**
視線恐怖因子	0.30**	0.27**	0.27**
意志薄弱因子	0.45**	0.33**	0.14
無気力因子	0.28**	0.23**	0.15

スピアマンの順位相関係数 **:P<0.01

表 16 に示すとおり、同調行動得点と特に関連の強かった対人恐怖心性各因子を見ると、1 年生は自他過剰因子 ($r_s = 0.53$)、2 年生は人前での発言困難因子 ($r_s = 0.50$)、3 年生は自他過剰因子 ($r_s = 0.37$) であった。ここで、対人恐怖心性各因子の得点を学年別に見たとき、1、3 年生では自他過剰因子、2 年生では人前での発言困難因子が他因子に比べて有意 ($P<0.01, 0.05$) に高く、各学年で同調行動と関連が

ある対人恐怖心性各因子と一致している。これは、2年生は感情抑制をしやすいという特徴⁹⁾が対人恐怖心性に影響し、人前での発言困難傾向の高さが同調行動との関連の強さに影響していると考えられる。

学年別に同調行動各因子の得点と対人恐怖心性の関連を見ていくと、自己犠牲追従因子と対人恐怖心性得点の関連で、1年 $r_s = 0.62$ とかなりな正の相関が見られ、2年 $r_s = 0.40$ 、3年 $r_s = 0.28$ とやや正の相関が見られた。また、自己犠牲追従因子と関連の強かった対人恐怖心性各因子は、1年生は人前での発言困難因子 ($r_s = 0.70$)、2年生は人前での発言困難因子 ($r_s = 0.57$)、3年生は自他過剰因子 ($r_s = 0.37$) であった。このことから、学年に関わらず、自己犠牲追従、つまり、表面的な同調行動をとりやすい生徒は、人前での発言困難傾向と自他過剰傾向が高いと考えられる。

3) 部活動加入の有無別にみた同調行動得点と対人恐怖心性得点の関連

表 17 に示すとおり、部活動の有無別にみた同調行動得点と対人恐怖心性得点との関連を見てみると、同調行動得点と対人恐怖心性得点との関連は、部活をしている $r_s = 0.41$ とかなりな正の相関があり、部活をしていない $r_s = 0.36$ とやや正の相関が見られた。さらに、部活をしている同調行動得点高群 (44.7 ± 20.70 点) は、低群 (18.4 ± 14.37 点) よりも対人恐怖心性得点が有意 ($P < 0.01$) に高く、部活をしていない生徒も同様の結果であった。高橋ら²⁸⁾は、部活に加入することによって、新鮮な環境下に身を置き、様々な初対面の団体と関係性を持つことで、他者への貢献を促進するだけでなく、自分自身を上手に管理、コントロールする柔軟な対応能力を身につけられると述べている。しかし今回は同調行動と対人恐怖心性の関連には、部活の加入の有無は関係があるとは言えなかった。

表 17 部活加入の有無における同調行動得点と対人恐怖心性得点の関連 (r_s)

	対人恐怖心性得点	
	部活をしている	部活をしていない
	n=232	n=135
同調行動得点	0.41**	0.36**

スピアマンの順位相関係数 ** $P < 0.01$

さらに、同調行動と特に関連が強い対人恐怖心性因子を見ると、部活をしている生徒では、自他過剰因子 ($r_s = 0.47$)、次いで人前での発言困難因子 ($r_s = 0.45$) であり、部活をしていない生徒では人前での発言困難

因子 ($r_s = 0.48$)、次いで自他過剰因子 ($r_s = 0.42$) であることが分かった。このことから、部活をしている生徒で同調行動をとりやすい生徒は、自他過剰の傾向があり、部活をしていない生徒で同調行動をとりやすい生徒は、人前での発言困難傾向があると考えられる。

同調行動の各因子と対人恐怖心性との関連では、部活加入の有無に関わらず、同調行動各因子と対人恐怖心性には関連があることが分かった。また、特に自己犠牲追従因子と対人恐怖心性は、部活をしている $r_s = 0.45$ 、部活をしていない $r_s = 0.44$ とかなりな正の相関が見られた。

表 18 部活加入の有無における自己犠牲追従因子得点と対人恐怖心性各因子得点の関連 (r_s)

対人恐怖心性各因子	同調行動：自己犠牲追従因子	
	部活をしている	部活をしていない
	n=232	n=135
自他過剰因子	0.40**	0.43**
集団不適応因子	0.30**	0.29**
人前での発言困難因子	0.57**	0.56**
視線恐怖因子	0.36**	0.29**
意志薄弱因子	0.41**	0.29**
無気力因子	0.22**	0.27**

スピアマンの順位相関係数 ** $P < 0.01$

表 18 に示すとおり、自己犠牲追従因子に最も関連が強い対人恐怖心性因子を見ると、部活の加入の有無に関わらず、人前での発言困難因子であった。これは、部活をしていない生徒も同様の結果であった。この結果は、全体で見たとき、自己犠牲追従因子と関連がある対人恐怖心性因子が人前での発言困難因子であったという結果と一致している。このことから、部活の加入の有無に関わらず、表面的同調をとりやすい生徒は、対人恐怖心性が高く、中でも発言困難傾向が高いと考えられる。

表 19 クラスの雰囲気を感じ方別における同調行動得点と対人恐怖心性得点の関連 (r_s)

	対人恐怖心性得点			
	良い	やや良い	あまり良くない	良くない
	n=172	n=166	n=23	n=5
同調行動得点	0.44**	0.40**	0.61**	- 0.90*

スピアマンの順位相関係数 **:P<0.01 *P<0.05

表 20 クラスの雰囲気を感じ方別における同調行動得点と対人恐怖心性各因子得点の関連 (r_s)

対人恐怖心性各因子	同調行動得点			
	良い	やや良い	あまり良くない	良くない
	n=172	n=166	n=23	n=5
自他過剰因子	0.49**	0.49**	0.38	- 0.56
集団不適応因子	0.28**	0.24**	0.35	- 0.21
人前での発言困難因子	0.43**	0.45**	0.89**	- 0.41
視線恐怖因子	0.29**	0.29**	0.40	- 0.82
意志薄弱因子	0.31**	0.37**	0.59**	- 0.82
無気力因子	0.27**	0.22**	0.26	0.16

スピアマンの順位相関係数 **:P<0.01

4) クラスの雰囲気別にみた同調行動得点と対人恐怖心性得点の関連

表 19 に示すとおり、同調行動と対人恐怖心性との関連を見ると、「良い」 $r_s = 0.44$ 、「やや良い」 $r_s = 0.40$ と正の相関が見られた。同調行動各因子と対人恐怖心性の関連を見ると、自己犠牲追従因子得点と対人恐怖心性得点で「良い」 $r_s = 0.46$ 、「やや良い」 $r_s = 0.51$ と、かなりな正の相関が見られた。これより、クラスの雰囲気を肯定的に感じている生徒で、表面的な同調をとりやすい生徒は、対人恐怖心性が高いことが分かった。葛西・松本⁶⁾は自己犠牲をしやすい人は慢性的に感じられる不安がやや高いことや自分が我慢してでも友人に合わせることによって、その集団に所属しようとしていると述べている。このことから、クラスの雰囲気を肯定的に感じている生徒でも、自分が無理をしてでも相手に合わせようとする自己犠牲傾向の生徒は、不安を低減しようとして表面的同調行動をとると考えられる。

また、表 20 に示すとおり、同調行動と対人恐怖各因子の関連を見てみると、同調行動得点と自他過剰因子得点で「良い」 $r_s = 0.49$ 、「やや良い」 $r_s = 0.49$ と、かなりな正の相関が見られた。さらに表 21 に示すとおり、仲間への同調因子得点と対人恐怖心性各因子得

点の関連においても、「良い」 $r_s = 0.44$ 、「やや良い」 $r_s = 0.39$ で仲間への同調因子と自他過剰因子に正の相関が見られた。これはつまり、クラスの雰囲気を肯定的に感じており、積極的に同調しようとする生徒は、他人や評価される自分を気にする傾向にあると考えられる。

岡田⁵⁾は、積極的に円滑な友人関係を維持するに関心が高い青年は、友人からの評価や視線に対して敏感であると指摘している。また、葛西・松本⁶⁾は積極的な同調行動をするものは、友人に自分を良く見せたいという思いが働いていると述べている。つまり、今回クラスを肯定的に感じている生徒は、良い雰囲気の中に属する生徒たちに対して自分もその中に入りたい、気に入られたいという感情を持ち、周りの目を意識しながら積極的に友人に合わせているのではないかと考えられる。

表 19 に示すとおり、クラスの雰囲気を「あまり良くない」と感じている生徒の同調行動と対人恐怖心性の相関は、 $r_s = 0.61$ とかなりな正の相関が見られた。同調行動各因子と対人恐怖心性の関連を見ると、 $r_s = 0.59$ で仲間への同調因子得点と対人恐怖心性得点にかなりな正の相関が見られた。これより、クラスの雰囲気を「あまり良くない」と感じているにも関わらず、積極的な同調をとりやすい生徒は、対人恐怖心性が高いと考えられる。

また、クラスの雰囲気を「あまり良くない」と感じている生徒における同調行動と対人恐怖心性各因子の関連を見てみると、表 20 に示すとおり、 $r_s = 0.89$ で同調行動得点と人前での発言困難因子得点にかなりな正の相関が見られた。また表 21 に示すとおり、クラスの雰囲気を「あまり良くない」と感じている生徒における仲間への同調因子得点と対人恐怖心性各因子得点の関連においても、 $r_s = 0.75$ で仲間への同調因子と人前での発言困難因子に強い正の相関が見られた。これはつまり、クラスの雰囲気を「あまり良くない」と感じているにも関わらず積極的に同調しようとする生徒は、大勢の前で発言できないなどの臨場的な社会的不安を表す人前での発言困難傾向が強いと考えられる。

さらに、表 19 に示すとおり、クラスの雰囲気を「良くない」と感じている生徒は、同調行動と対人恐怖心性の関連で、 $r_s = - 0.90$ と強い負の相関が見られた。これより、クラスの雰囲気を「良くない」と感じ、同調行動をとりやすい生徒は対人恐怖心性が低い

表 21 クラスの雰囲気を感じ方別における仲間への同調因子得点と対人恐怖心性各因子得点の関連 (r_s)

対人恐怖心性 各因子	同調行動；仲間への同調因子			
	良い n=172	やや良い n=166	あまり良 くない n=23	良くない n=5
自己過剰因子	0.44**	0.39**	0.41*	- 0.67
集団不適応因子	0.16*	0.08	0.53**	- 0.46
人前での 発言困難因子	0.28**	0.23**	0.75**	- 0.56
視線恐怖因子	0.18*	0.15	0.30	- 0.56
意志薄弱因子	0.22**	0.25**	0.59**	- 0.97**
無気力因子	0.19*	0.10	0.26	0

スピアマンの順位相関係数 **:P<0.01 *P<0.05

と考えられる。

また、表 21 に示すとおり、クラスの雰囲気を「良くない」と感じている生徒における仲間への同調因子得点と対人恐怖心性各因子得点の関連については、 $r_s = -0.97$ で仲間への同調因子と意志薄弱因子に強い負の相関が見られた。これはつまり、クラスの雰囲気を「良くない」と感じ、積極的に同調しようとする生徒は、自分の意志や感情を統制できない不安や不満感は低いと考えられる。

深谷ら²⁹⁾の中学生を対象とした調査で、学校を楽しくないと感じている生徒は自分の居場所が見つからないと感じる傾向にあることが分かっている。よって、クラスの雰囲気をあまり良くないと感じている生徒は、周囲に積極的に同調することによって不安を低減し、自分の居場所を確保しようとしていると考えられる。

吉川・高橋³⁰⁾は、学級満足度が高い生徒は、自己開示スキルが高く、学級内で自分の思いを受け止めてもらえることで、自身が認められている、あるいは学級内に自分の居場所があるという安心感を持つことができる一方、学級満足度が低い生徒は、自己開示スキル、引いては居場所や安心感等が低いために、学級内での存在感や意識が薄くなり、周囲への阻害感や侵害感が高まるということを述べている。

以上のことから、クラスの雰囲気を感じ方には自己開示スキル、引いては居場所や安心感が関わっており、同調行動と対人恐怖心性の関連に影響していることが考えられる。

まとめ

今回、中学生のとり同調行動と対人恐怖心性の関連を明らかにすることを目的に、中学1年生～中学3年生を対象とした質問紙調査を行った。その結果および考察を元に、養護教諭としての支援を考えたい。

本研究で、同調行動と対人恐怖心性の関連が特に強かったのは、男女別では女子、学年別では1年生、部活加入の有無では部活をしている生徒、またクラスの雰囲気をあまり良くないと感じている生徒であった。つまりこれらの同調行動を多くとっている生徒は、対人恐怖心性が高いと考えられる。そのため、養護教諭を含めた教師は、生徒に対人恐怖がみられる場合や過度の同調的言動に着目し、早期に個別の相談活動等の支援につなげていく必要があると考える。また、生徒の友人関係を理解し、学級の雰囲気の捉え方を含めて情報収集を行うことも大切になるであろう。

特に、養護教諭は、保健室で悩みを抱えた生徒と個別の相談活動を行う機会が多い。しかし、それだけでなく、保健室外での生徒の日常的な様子についても校内巡視でとらえたり、教諭と連携し、家庭環境等についても必要に応じて情報を収集している。このような生徒へ対応できる組織づくりのコーディネートを担うことが適切な支援につながっていくと考えられる。

また、過度の同調行動をとることなく、相手を尊重しつつ自分の気持ちを表現するアサーショントレーニングなどの積極的な集団指導を取り入れることは、対人恐怖心性の低減のために重要と考えられる。

おわりに

本研究は、中学生のとり同調行動との対人恐怖心性の関連を明らかにすることを目的として行った。

本研究の限界としては、中学校1校のみを調査したという対象の狭さがあげられる。質問項目では、部活動加入の有無についての項目で「部活をしていない」の回答者の中に、今までは部活をしていたが、調査時期に部活動を引退した者も含まれていた可能性があったこと、クラスの雰囲気を感じ方についての項目で、その感じ方の原因やクラスがどのような雰囲気なのかを具体的に記述が出来なかったことが挙げられる。

よって、今後の課題としては、地域や校数、対象者数を増やして調査を行う必要がある。また、調査対象者のプロフィールの質問内容を推敲し、調査・研究していく必要があると考えられる。

引用文献

- 1) 岡田努：現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察，教育心理学研究，43，354-363，1995
- 2) 福森崇貴・小川俊樹：青年期における不快情動の回避が友人関係に及ぼす影響：自己開示に伴う傷つきの予測を媒介要因として，パーソナリティ研究，15（1），13-19，2006
- 3) 高井範子：青年期における人間関係の悩みに関する検討，太成学院大学紀要，10，85-95，2008
- 4) 菊浦友美・吉岡和子：青年期の対人関係における攻撃性の表出とアサーション及び自己評価との関連，福岡県立大学人間社会学部紀要，18（2），53-63，2010
- 5) 岡田努：現代大学生の認知された友人関係と自己意識の関連について，教育心理学研究，47，432-439，1999
- 6) 葛西真記子・松本麻里：青年期の友人関係における同調行動一同調行動尺度の作成，鳴門教育大学研究紀要，25，189-203，2010
- 7) 上野行良・上瀬由美子・松井豊，他：青年期の交友関係における同調と心理的距離，教育心理学研究，42，21-28，1994
- 8) 中村千尋・高木秀明：青年期における対人不安・緊張の構造：発達段階による変化に着目して，横浜国立大学教育相談・支援総合センター研究論集，12，31-52，2012
- 9) 永井徹：対人恐怖的心性に関する心理学的研究，教育心理学年報，28，191-192，1989
- 10) 堀井俊章：青年期における対人不安意識の発達の变化（続報），山形大学紀要教育科学，13（1），79-94，2002
- 11) 岡田努：現代の大学生における「内省および友人関係のあり方」と「対人恐怖心性」との関連，発達心理学研究，4（2），162-170，1993
- 12) 松田常美：青年期における理想の友人関係と対友人不安感情が現実の友人関係に及ぼす影響，甲南女子大学大学院論集人間科学研究編，6，49-65，2007
- 13) 落合良行・佐藤有耕：青年期における友達とのつきあい方の発達の变化，教育心理学研究，44，55-65，1996
- 14) 佐藤詩織・田代有紀：構成的グループエンカウンターによる中学生の対人恐怖心性の变化，平成22年度熊本大学教育学部養護教諭養成課程卒業論文，2011
- 15) 藤原正光：同調行動志向尺度・個人行動志向尺度作成の試み（1），文教大学教育学部『教育学部紀要』，40，1-9，2006
- 16) 堀井俊章・小川捷之：対人恐怖心性尺度の作成（続報），上智大学心理学年報，21，43-51，1997
- 17) 文部科学省 中学生・高校生のスポーツ活動に関する調査研究協力者会議：運動部活動の在り方に関する調査研究報告，1997
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/sPorts/001/toushin/971201.htm
- 18) 上妻由季・福留麻理：中学生・高校生における生活習慣と自己肯定感との関連，平成22年度熊本大学教育学部養護教諭養成課程卒業論文，2011
- 19) 深谷昌志：「学校」という名の心理空間，モノグラフ・中学生の社会，57，2-85，1997
- 20) 深谷昌志・三枝恵子・深谷野亜，他：中学生の悩み，モノグラフ・中学生の社会，70，2-80，2001
- 21) 塚本貴史・濱口佳和：親和動機と攻撃性および社会的スキルが友人関係満足感に及ぼす影響—中学生の場合—，筑波大学紀要 発達臨床心理学研究，15，45-55，2003
- 22) 石田靖彦・丹村明寿香：中学生における仲間集団の特徴と仲間集団との関わりが学校における規範意識と逸脱行動に及ぼす影響，愛知教育大学紀要教育科学，61，117-125，2012
- 23) 崔京姫：中学・高校生における感情表出の制御に関する研究，筑波大学博士（心理学）学位論文，第3章 中学・高校生における感情表出の制御の発達の变化，54-62，1999
- 24) 藤岡千秋・稲岡弘子：中学生の不安傾向に関する検討（1），大阪教育大学紀要 第V部門，35（1），109-119，1986
- 25) 田所直人：学級経営改善に関する研究—「学級の雰囲気と自己肯定感を把握する質問紙（C&S質問紙）」の活用のための工夫を通して—，1-6 www.center.gsn.ed.jp/soudan/cs/q/cs-h22nt.Pdf
- 26) 玉上詩織：青年期における同調行動選択—所属欲求，相互独立・相互協調的自己観，自己受容の影響—，関西大学社会学部土田昭司ゼミナール卒業論文，1-5，2011
- 27) 栗林克匡：シャイネスが作り笑いに及ぼす影響，北星学園大学社会福祉学部北星論集，49，171-177，2012
- 28) 高橋明宏・永松幸一・岩熊美奈子，他：学外教育施設を利用した運動部活動の取り組みと人間性変容の一考察，都城工業高等専門学校研究報告，46，91-98，2011
- 29) 深谷昌志・深谷野亜・山田剛，他：居場所としての学校，モノグラフ・中学生の社会，69，2-100，2001
- 30) 吉川栄子・高橋宗：学校ざらい感情と友だちタイプとの関連，聖泉論叢，16，75-87，2008